

保育観の意識化とそれに果たすカンファレンスの役割

—保育行為を内省するとは—

鳥光美緒子 中坪 史典 佐々木裕子 縫部 義憲 米神 博子
林 よし恵 松本 信吾 道下 真穂 山崎 晃 小林 正夫
井上 勝 七木田 敦 深田 昭三

1. はじめに

1980年代半ば以降、わが国の教育界において、「反省的実践家 (reflective practitioner)」としての教師の議論が活発に展開されてきている。日本教育学会第50回大会では、「教育研究者の社会的性格—実践・臨床の現場から—」と銘打たれたシンポジウムが開催され、その中で佐藤学 (1992) は、教育実践者の思考の特徴として「熟考」「省察」という2つの概念を提示、これらが「反省的実践家」の概念とつながることを指摘する。また同シンポジウムにおいて津守真 (1992) は、保育実践者の日々の生活の特徴として、①出会うこと、②交わること、③生命的に現在を形成すること、④省察の4点を掲げ、ここでも保育者が「省察」することの重要性が提示されている。

こうしたわが国の教育界における議論の動向に伴い、保育界においても、保育者を対象として、自らの保育についての「熟考」と「省察」を促し、「反省的実践家」を育成するための機会の在り方が模索され、中でもカンファレンス (保育研修会や検討会) は、保育者の「熟考」と「省察」を促すための機会となり得る可能性を秘めた場として、その重要性が指摘されている (平山, 1995)。そしてまた多くの幼稚園において、保育研究者と保育実践者のネットワークを核として、保育者の日々の実践の意識化、自覚化などを中心的テーマに、複数の保育者や保育研究者が、あるひとつの保育を互いに見たり報告しあうことで、またその保育を行った実践者が自らの保育を振り返り「熟考」と「省察」を行うことで、次の保育に生かすことを目的としたカンファレンスが頻繁に試みられている。

ところでこのようなカンファレンスは、具体的にどのような形態で行われているのだろうか。どのような

ことが課題とされ、どのような議論がなされているのだろうか。カンファレンスを通して保育者は自らの保育をどのように「熟考」「省察」しているのだろうか。「熟考」「省察」を通じた「反省的実践家」としての保育者育成は、カンファレンスを通して本当に可能なのであろうか。本研究では、各々の保育者が、自らの保育を「内省」し、「意識化」し、それによって保育観を高めあうことを目的に行われている、広島大学附属幼稚園におけるカンファレンスの事例を分析の対象として、カンファレンスの役割やその機能、可能性や問題点等について、保育者の「熟考」「省察」「反省的実践家」をキー概念にして検討する。

カンファレンスを題材とした先行研究は、秋田・無藤・安見・藤岡 (1995) による研究者のコンサルテーションを検討した研究、田代 (1996) による保育者の枠組みの自覚化を検討した研究、戸田 (1999) による保育行為の判断としての「価値」を検討した研究など、幾つかの有益な知見が報告されてはいるが、その蓄積は未だ少なく、また保育者の「熟考」「省察」「反省的実践家」をキー概念にした検討は、これまで殆どなされていない。

尚、本論文は以下の章構成で展開する。

1. はじめに
2. 保育界の動向：「反省的実践家」の育成とカンファレンス
3. 本研究の分析対象と分析方法
4. 各カンファレンスにおける議論の概要
5. カンファレンスを解読する：教授・学習過程としてのカンファレンス
6. おわりに

以上の章構成における執筆分担は次の通りである。

第1章～第3章 (中坪 史典)

Mioko Torimitsu, Fuminori Nakatsubo, Yuhko Sasaki, Yoshinori Nuike, Hiroko Komekami, Yoshie Hayashi, Shingo Matsumoto, Maho Michishita, Akira Yamazaki, Masao Kobayshi, Masaru Inoue, Atsushi Nanakida and Shozo Fukada : Consciousness Raising of Early Childhood Teachers and the Function of Conference in It's Processes — How do they reflect on their own educational beliefs ? —

2. 保育界の動向：

「反省的実践家」の育成とカンファレンス

「反省的実践家」とは

「反省的実践家 (reflective practitioner)」とは、マサチューセッツ工科大学教授であり、哲学者であるドナルド・ショーンによって提起された概念である (Schon, 1983)。ショーンは、建築デザイナー、都市工学デザイナー、精神分析カウンセラー、経営コンサルタントなどの事例研究を通して、これまで「科学技術の合理的適用 (technical rationality)」を原理としてきた専門家の技術的実践、つまり専門家各自の専門領域における既知の技術の適用にかかわって、現代の専門家は「活動過程における省察 (reflection in action)」を原理とする「反省的実践」においてその専門性を発揮していると主張した。ショーンによると、これまで専門領域の基礎科学と応用科学の確立に支えられて発展してきた専門家の実践は、今や破綻をきたしているという。今日クライアントが抱える問題はどれも複雑かつ総合的であり、専門化された狭い領域の技術的実践のみをもって専門家が対処することは、問題の解決につながらないばかりでなく、いっそう複雑で深刻な問題を導くことになる。あるいは自らの専門領域を技術的実践のみをもって対処することは、山の頂点に身を置いて、クライアントが直面する泥沼のような問題とは縁のない存在になるだけである。それに対して、クライアントと共に生きる現代の専門家は、不確かで曖昧な問題状況に探りを入れ、これまでの経験の中で培った暗黙知を駆使しながら行動し、実践に対する反省的思考、つまり「熟考」と「省察」を繰り返すことで、自らの専門的力を高めながら、各々の仕事に従事しているというのである。

ショーンが提起したこの概念は、教育を対象としたものではなかったが、数年後、教育のパラダイムを転換する推進力となった。それは、教師教育や授業研究に関する分野もまた、基礎科学と応用科学の確立に支えられて発展してきた各教師の技術的実践に支配されてきたからである (佐藤, 1992)。

そしてこの概念は、わが国では佐藤 (1992) によって紹介される。佐藤は、建築デザイナー、都市工学デザイナー、精神分析カウンセラー、経営コンサルタントなどと同様に、学校の教師の場合もまた、複合的で難解な文脈で生起する複雑な教育現実に対して、単にこれまで自らが保有している教育に関する理論的知識

や技術の量のみで対応するのではなく、それらの知識や技術をレパートリーとしながら、具体的な教育実践場面の文脈に即して展開される問題の構成と解決のための「熟考」と「省察」を重ね、自らの教育実践に取り組むことが重要であり、いわば「反省的実践家」は、これからの教師にとって重要な資質・力量となるという。

保育界においては、津守 (1987) が、ショーンの「反省的実践家」の概念とは別の文脈で、同義の指摘を行っている。津守は、「複合性」「不確実性」「不透明性」が絡み合う保育現実に対して、保育者が日々の実践を行う中で重要な資質・力量のひとつとして、保育者の「省察」を掲げる。津守によると、保育実践の最中には、保育者は直感や身体的レベルで子どもの世界を理解している。しかし1日の保育が終わった時点で、自分の保育を振り返って頭の中で追体験したり、記録を取ったりすることによって、自分の理解の不十分な点や、実践中には殆ど気付かなかった小さな行為の重要な意味に気付いたりして、それが今までの理解の構造を変えたりする。このようにして保育者の成長と子どもの成長は、同時に進行するという。

また浜口 (1982) は、保育者の省察の過程を分析している。浜口は保育者の省察の過程を、①実践、②想起、③記録の記述 (言語化)、④解釈、⑤再び実践への5つに区分し、各過程を「実践→想起」「想起→記録の記述」「記述→解釈」「解釈→再実践」という循環で捉え、各々の過程における問題と留意事項を具体的保育実践に基づいて考察、その上で、保育者が行うこれら省察の過程を「反省的方法」と称している。さらに森上 (1997) は、冒頭で記した日本教育学会第50回大会シンポジウムにおける佐藤や津守の言及を引用しながら、これからの保育者は、日々省察を重ねながら反省的に保育に取り組む「反省的実践家」としての保育者、「研究的実践家」としての保育者であることが重要であると指摘し、ショーンが提示した「反省的実践家」の概念を、わが国の保育界において紹介している。

このように、ショーンの「反省的実践家」の概念とは別の文脈で指摘されてきた津守や浜口の議論は、「反省的実践家」の概念の流布とともに再認識されると同時に、森上によって「反省的実践家」の概念と結びつけられ、今日のわが国の保育界における重要な課題のひとつとして捉えられていると言えよう。

カンファレンスの重要性

それでは一体、「反省的実践家」としての保育者はどのような形で育成されるのだろうか。保育者の日々の保育に対する「熟考」と「省察」は、どのような形で

なされればよいのだろうか。

雑誌『保育研究』(Vol.10, No.3, 1989)では、保育者が日々の保育を反省するためのひとつの方法として、保育日誌の記述が取り上げられ、「保育日誌の再点検」という特集が組まれている。これは、浜口が示した保育者の省察の過程に即して言うならば、③記録の記述(言語化)と捉えられよう。この雑誌の対談の中で大場(1989)は、保育者は単に保育日誌を記述するだけでなく、記述された記録の解釈について、第三者の見方を聞くことで、その人の軸となる部分が確かなものになることがあると述べており、他の保育者などとの議論の重要性を指摘している。また阿部(1989)は、記述されたものを土台に、それぞれに保育の経験をもつ保育者の視点から多角的に検討・討議される場として、カンファレンスの重要性を掲げている。

また大豆生田・高杉・若月・渡辺(1996)は、保育者が日々の保育を反省するためのひとつの方法、保育現実のリアリティーに迫るひとつの方法としてVTRの使用を取り上げ、撮影されたVTRをもとにカンファレンスを重ねることで、保育者が、子どもがわからなくなっている自分に気づき、その苦しさや葛藤を経験しながら自らの保育を「意識化」し、カンファレンスに参加した保育研究者とも共感し合う過程を描き出しており、ここでもカンファレンスの重要性が指摘されている。

さらに森上(1993)は、「省察」は一般的に言って個人の内面において行われるが、実践をともにしている保育者が一緒に検討し合う共同作業の中で、理解は共同のものとなり、公共性を増すと述べている。

つまりカンファレンスは、「反省的実践家」としての保育者を育成する上で、保育者が自らの日々の保育に対する「熟考」と「省察」を行う上で、重要な機会となり得る可能性を秘めた場として期待されていると捉えることができる。

3. 本研究の分析対象と分析方法

カンファレンスの目的

これまで述べた通り、保育者の「熟考」と「省察」、「反省的実践家」としての保育者育成は、わが国の保育界における重要な課題のひとつであり、こうした動向を踏まえる形で、広島大学附属幼稚園においても、平成11年度の研究主題として「子どもにとっての保育者の意味を探る—自分の保育の内省を通して—」が掲げられた(広島大学附属幼稚園, 1999)。そして保育者が自らの保育を「内省」するための重要な場として、本園の保育者および広島大学教育学部の教官を交えたカ

ンファレンスが定期的実施されることとなった。

さて本園では、カンファレンスそのものは今年度に限ったものではなく、前年度までも定期的実施されてきた。しかしながら、今年度は前述の研究主題が掲げられたことにより、とりわけカンファレンスの持つ意味の重要性を各々の保育者が自覚することとなった。それは具体的には、「保育者は自分の保育を他者から指摘された場合、それを防御する傾向にある。しかしこうした防御は、保育者の成長を妨げる要因となる。保育者は自分の保育を防御するのではなく、むしろそれらをさらけ出すことで、また他の保育者も互いに忌憚のない意見を出し合うことで、保育者は自分の保育を内省し、意識化することができる。そのためにカンファレンスは重要な役割を果たす」と認識されるようになったのである。

つまり本園は、カンファレンスを通して「子どもとの関わりの中に見え隠れする自分自身の保育観を意識化すること、自分自身の保育を内省すること、それによって互いの保育観を高め合い、よりよい保育を追求すること」を目指していると言える。

尚、本園では、自らの保育に対する保育者の反省を、「熟考」「省察」ではなく、「内省」「意識化」という言葉で表現される。これらが、ショーンが定義した「熟考」「省察」と同義に捉えられるかどうかについては検討の余地がある。しかしながら、おそらくはショーンが提起した「反省的実践家」の概念を背景に、この「内省」「意識化」の問題が重要視されるようになったことは事実であろうし、実施されるカンファレンスもまた、「反省的実践家」としての保育者育成を潜在的に意図していることから、以下の考察では、本園の保育者が表現する「内省」「意識化」という言葉に沿ってカンファレンスの分析を行う。

カンファレンスの実施プロセス

本園は、年少児・年中児・年長児の合計3クラスから構成される園である。本園では、定期的に研究保育(園内研究と呼ばれる)が行われ、その後、研究保育に対するカンファレンスが行われる。カンファレンスの実施プロセスは、以下の通りである。

実施頻度：月に3回

(年少、年中、年長、各1回づつ)

実施時間：1回につき約2時間

実施時期：「第1期」(平成11年5月)

「第2期」(平成11年6月)

「第3期」(平成11年9月)

参加者：縫部 義憲(園長, 広島大学)

米神 博子(副園長)

林 よし恵 (年少児クラス担任)
松本 信吾 (年中児クラス担任)
道下 真穂 (年長児クラス担任)
菅田 直江 (保育者)
山崎 晃 (広島大学, 幼児心理学)
井上 勝 (広島大学, 幼児保健学)
鳥光美緒子 (広島大学, 幼児教育学)
七木田 敦 (広島大学, 幼児教育学)
深田 昭三 (広島大学, 幼児心理学)
中坪 史典 (広島大学, 幼児教育学)
佐々木裕子 (広島大学, 幼児心理学)
仲渡規矩子 (元副園長)

尚, 「第1期」(平成11年5月)のカンファレンス参加者は, 主に本園のスタッフである縫部・米神・林・松本・道下・菅田で構成され, 「第2期」(平成11年6月)は, これらのメンバーに加えて, 研究者(広島大学教育学部)の立場に立つ井上・鳥光・七木田・深田・中坪・佐々木が参加し, 「第3期」(平成11年9月)は, 以上のメンバーに加えて仲渡が参加した。各カンファレンスにおける具体的参加者は後述の通りである。

カンファレンスの進行は, 主に米神(副園長)が担当した。研究保育を担当した保育者が, その日の保育の目的や自らの内省を記した資料として作成し, その資料をもとに自らの保育を振り返るとともに, 他の保育者が意見・感想等を出し合う形式でカンファレンスが進められた。研究者もまた, 保育者の議論に対してコメントを出し合った。尚, 基本的には, 研究保育を午前中に実施し, カンファレンスを午後から実施するという形態で進められたが, スケジュールの都合等で, カンファレンスが後日行われる場合も生じた。

対象と方法

本研究では, 広島大学教育学部のメンバーが参加した「第2期」(平成11年6月)および「第3期」(平成11年9月)のカンファレンスを対象に分析する。「第2期」「第3期」の研究保育およびカンファレンスは, 以下の日程で実施された。

「第2期」(第1回)

6月23日: 研究保育 (年長クラス, 道下真穂)

6月24日: カンファレンス

「第2期」(第2回)

6月30日: 研究保育 (年中クラス, 松本信吾)

6月30日: カンファレンス

「第2期」(第3回)

7月5日: 研究保育 (年少クラス, 林よし恵)

7月5日: カンファレンス

「第3期」(第1回)

9月17日: 研究保育 (年長クラス, 道下真穂)

9月20日: カンファレンス

「第3期」(第2回)

9月21日: 研究保育 (年中クラス, 松本信吾)

9月27日: カンファレンス

「第3期」(第3回)

9月28日: 研究保育 (年少クラス, 林よし恵)

9月29日: カンファレンス

尚, 「第2期」(第3回)の研究保育およびカンファレンス(7月5日予定)は, 当日, 集中豪雨等の被害によって臨時休園となり, 中止された。従って分析対象とするカンファレンスは, 計5回である。

以上, 5回のカンファレンスは, 全てテープレコーダーで記録を取り, その一部は, 細部まで克明に文字化することで再現した。またカンファレンス実施時に保育者が配布した資料も全て収集した。さらに冬期休暇を利用して, 12月22日に鳥光・中坪が林・道下に対して, 12月24日に鳥光・佐々木が米神・松本に対して各々インタビューを行った。インタビューに要した時間は各々約2時間, その詳細はメモを取る形で記述するとともに, テープレコーダーにも記録した。以上のデータを分析の対象とした。

分析にあたっては, 各カンファレンスで議論された内容を整理するとともに, カンファレンスを通して保育者が行った「内省」「意識化」の過程を検討することで, 「反省的实践家」としての保育者育成の場としてのカンファレンスの役割やその機能, 可能性や問題点等を考察した。

4. 各カンファレンスにおける議論の概要

「第2期」(第1回)

6月23日の研究保育と6月24日のカンファレンス

研究保育 (6月23日)

年長児クラス, 担任・道下真穂

道下以外の保育者は, 全員道下の保育を観察するとともに, 以下のように役割を決めて記録をとった。

林: 保育者の動きを中心に記録し, それに伴う子どもの様子を時系列に沿って記録する。

松本: 保育者が気にかけてはいるが, 普段の保育では関わりが難しいと感じている, 女兒5人グループについて記録する。

米神: 子どもの遊びを中心に記録し, その遊びにおける保育者の関わり方を記録する。

以上の記録は, カンファレンス時の資料として作成された。

カンファレンス（6月24日）

年長児クラス，担任・道下真穂

場 所：附属幼稚園職員室

参加者：縫部・米神・林・松本・道下・鳥光・
深田・中坪・佐々木

カンファレンスは，道下が，研究保育について資料を作成し，自ら気になった点などをあげながら行われた。道下が報告した保育のエピソードは，①飼っている生き物とのかかわり，②普段あまり友だちと関わっていない，絵の具遊びに興味を持っている女兒との関わり，③笹舟遊び，④人魚遊び，⑤酸素ポンベ作りなどであった。

道下は，自分が意図したことに対して，子どもたちが興味関心を持って関わってくると，自分も嬉しくなり，一緒に遊ぶことで，周囲が見えなくなるような面があること。そして，子どもたちの活動を見守ったり，待つ余裕を持った方がいいのか，それともいっしょにどんどん遊びを進めていった方がいいのかどうかについて悩んでいることを報告した。また保育者と一対一の関わりが多く，遊びが続かない女兒が，自分から友だちの遊びに入っていく様子も報告した。

米神は，飼っている水カマキリの飼育箱に餌であるオタマジャクシを入れることの残酷性の指摘と，笹舟で子どもが遊んだときに，米神の働きかけで，遊びが発展したということも報告した。

松本は，人魚遊びの場面で，米神の働きかけによって行われた子どもの活動が，自らが望んだ活動ではなく，全体的な活動になることで，個々の子どもの思いがその活動の中に埋没してしまった可能性を指摘した。その後，米神と松本の間でその問題をめぐって，議論が起こった。

「第2期」（第2回）

6月30日の研究保育と6月30日のカンファレンス
研究保育（6月30日）

年中児クラス，担任・松本信吾

松本以外の保育者は，全員松本の保育を観察するとともに，以下のように役割を決めて記録をとった。

林：保育者が気にかけてはいるが，普段の保育でもうすこし，ゆっくりと見てみたい男児の行動を記録する。

道下：松本の動きを中心に記録し，それに伴う子どもの様子を時系列に沿って記録する。

米神：子どもの遊びを中心に記録し，その遊びにおける保育者の関わり方を記録する。

以上の記録は，カンファレンス時の資料として作成された。

カンファレンス（6月30日）

年中児クラス，担任・松本信吾

場 所：附属幼稚園職員室

参加者：縫部・米神・林・松本・道下・鳥光・
深田・中坪

松本は報告で，朝，登園時の迎え入れのときの子どもの関わりの中で，「後で～しにいこう」「後で～してね」等のことは掛けをするが，そのままにしてしまうということも報告し，その場しのぎの対応をしてしまうことはできるだけ避けたい旨を述べた。それに対して米神は，道下の保育では必ずその日のうちに子どもが訴えてきたことに対応する旨を指摘した。また松本は，突然泣きながら自分のところへやってきた子どもに対応した際，周囲に集まって来た子ども達を「犯人探し」するような気持ちで見ってしまったことを反省し，泣いた子どもに対しては原因究明するよりも，寄り添うことで，安らいだり，安定するというところについて考えさせられたことを報告した。集いのとき，自分が話したいことを焦点化してなかったため，話が前後してしまい，伝えたいことがうまく伝えられなかったことを報告した。また飼っていたカブトムシや蝶の羽化についても不思議さが共有できるよう伝えなかったが，人に観察されている状況で，余裕がなかったという内省を報告した。

道下は，上記の泣いた子どもを前年度担任していたこともあり，松本との関わりで，子どもが成長し，松本と信頼関係を築いているように感じていることを述べた。そして，集いの時の松本の紙芝居の選択が，季節感と子どもをとりまく環境と内容がうまく合致していたことを指摘した。また自身との保育と照らし合わせながら，集いのときの個々の子どもたちの話をどこまで聞いてやるかということについての悩みも報告した。

米神は，松本が作成した資料について，松本が「気になった」後の状況を，読み手にわかるよう記述する必要性を指導した。また片づけの時間での行動では，意図や思いが見えなかった点，集いの時，紙芝居を読む前に子どもたちの位置を指導する必要性を指摘した。

林は，松本が気にかけていた子どもの友だち関係や成長している姿について報告した。

「第3期」（第1回）

9月17日の研究保育と9月17日のカンファレンス
研究保育（9月17日）

年長児クラス，担任・道下真穂

研究保育の観察者は，縫部・米神・山崎・鳥光・深田・中坪・佐々木・仲渡であった。第3期は，研究保育

の対象のクラスだけではなく、他のクラスも登園したため、研究保育の記録は、米神・仲渡が行った。記録は、カンファレンス時の資料として作成された。また、縫部の記録もカンファレンス時に使用された。

カンファレンス（9月20日）
年長児クラス，担任・道下真穂
場 所：附属幼稚園職員室
参加者：米神・松本・道下・林・鳥光・深田・
佐々木・仲渡

道下は、飼っている生き物と子どもとの関わりにおいて、保育者自身の好奇心から、子どもと一緒に不思議に思い、生態を調べたことを報告した。子どもがカマキリがバッタを食べて生き残るということに衝撃を受けたということに対して、対処のしかたの悩みや、自然界における弱肉強食の世界をうまく伝えきれなかったことを報告した。また子ども達が、遊びに興味を持っていなかったり、行き詰まっているときには、一緒に考え、きっかけができるように力を貸しているように思うが、軌道に乗り始めると他の子どもが気になり、その後の様子を捉えきれないことを内省として報告した。

米神は、道下の環境構成を肯定的に評価し、それは教育要領の改訂でも必要とされていることを述べた。また糞虫との関わり方には疑問を提示し、遊びの中でそれぞれの子ども達が経験している内容について保育者がどのように読みとっているのかが報告されることと、経過の分析の必要性も指摘した。また子どもの書いた鏡文字をさりげなく訂正したことも、重要なことだと評価した。また米神自らが、誤ってボールを他者にぶつけてしまった子どもに対して、言葉で謝るきっかけを与える場を設けたことを述べ、子どもに対して必要な体験をさせる保育者の役割を強調した。

また、昆虫の弱肉強食の世界において、「かわいそう」という感情を保育者自身のものとして、提示するべきだとする米神と、単に「かわいそう」だけでは片づけられないという立場の松本との間で論争が起こった。

「第3期」(第2回)

9月21日の研究保育と9月27日のカンファレンス
研究保育（9月21日）年中児クラス，
担任・松本信吾

研究保育の観察者は、縫部・米神・山崎・鳥光・深田・中坪・佐々木・仲渡であった。

研究保育の記録は主に、米神・仲渡が行った。記録は、カンファレンス時の資料として作成された。

カンファレンス（9月27日）
年中児クラス，担任・松本信吾
場 所：附属幼稚園職員室
参加者：縫部・米神・林・松本・道下・鳥光・中坪・仲渡

記録者が限定されたため、松本の報告、米神による疑問点や問題点の指摘、続いて仲渡による問題点の指摘を中心にカンファレンスが行われた。

松本から、研究保育について、内省を交えた報告が行われた。保育をしながらか、気になった子どもについては、殆どの子どもが久しぶりの登園のためか、すぐに遊び出す中で、なかなか遊び始めようとしなかった子どもと、ここ数日間、保育者と一対一で遊びたがる傾向の強い子ども、またあまり外で遊ぶことがなく、一人でいる子どもとは、今後ゆっくりと向き合っていく予定であることについて報告された。集いでは、多くの子どもが一斉に喋り出すか、それをどの程度受け入れ、どの程度保育者自身の思いを出していくかについて、悩んでいることが報告された。

米神の資料では、松本の報告にあった子どもたちへの対応についての疑問が述べられていたが、松本の報告で、ほぼ納得した様子であった。次いで、松本の子どもの活動に寄り添う姿が自然であること、さりげなき、子どもとの信頼感が築かれていることに評価がなされた。また集いの場面では、松本の台風についての話しの意図が見えなかった点と、絵本を読むときの提示の仕方の問題点と、欠席者の確認の意図についての疑問が提示された。子どもの話し合いの收拾の点については、話し合いのプロセスを保育者が生んでいく必要性と、内省しながら、苦しみながら、よりよく話し合いができるように工夫していく必要があるのではないかということが指摘された。

仲渡は、松本の子どもとの信頼感の確立を評価した。また、自らの長年の保育経験に基づいて、子どもの年齢的な発達をしながら、自然体験をどう生かすか、言葉遣いや環境についてなど、具体的な関わり方を教示した。降園時の保護者に対する松本の関わりから、保護者の松本への信頼感が感じられる一方で、保護者と関わる時間が長すぎるのではないかということが指摘された。

「第3期」(第3回)

9月28日の研究保育と9月29日のカンファレンス
研究保育（9月28日）年少児クラス，
担任・林よし恵

研究保育の観察者は、縫部・米神・山崎・鳥光・深田・中坪・仲渡であった。

研究保育の記録は主に、米神・仲渡が行った。記録は、カンファレンス時の資料として作成された。

カンファレンス（9月29日）

年少児クラス、担任・林よし恵

場 所：附属幼稚園職員室

参加者：米神・林・道下・松本・仲渡・菅田・

鳥光・深田・佐々木

林は、主に以下の点について報告した。①登園時に母親と離れられない子どもとの関わりについて②他の幼児に言いがかりをつけて自分の強さを誇示することの多い、子どもに対しての今後の関わりについて③虫取りでおとなしく、他の子どもとあまりかかわりをもたない子どもが上手に虫を捕まえることをクラスの子も達に知らせることによって、その子どもに対して注目を集めさせたかったという意図。また保育をしている際に、「自分の思いでどんどん保育を進めていってしまう」という内省も報告された。

米神は、朝の子ども達の受け入れでは林特有の落ち着いた雰囲気、子ども達としっかりとふれあうことで、信頼関係を確立していることを評価した。また母親と離れられない子どもにおける林の記述については、これまでの経緯や、背景、内省を詳しく記述することで、その子どもをどのように支えようとするのかを意識化する必要性を指摘した。また3歳児のハムスターへの関わり方について、疑問を提示した。そして、コオロギの飼育箱に水を入れる子どもに対して、米神自身が、反応することで、善悪の判断の枠を提示した事例から、保育者が場面によっては意図的に子どもに保育者自身の価値判断を示すことの重要性を指摘した。

仲渡からは、ハムスターとの関わりについてや、子どもへの言葉掛けや子どもの表現に対する姿勢へのアドバイスが行われ、子どもと同じような視点で共感することの必要性が強調された。

5. カンファレンスを解読する： 教授・学習過程としてのカンファレンス

カンファレンスにおける研究者の役割

第2期分2回、第3期分3回のカンファレンスのテープ、そして、その後に行われた2回のインタビューのテープを、全体を通して、聞き直してみた。そのテープの中には、分析者自身もまた登場する。分析を担当する研究者側のメンバーの全てがいつもそこにいたわけではないが、絶えず誰かが、そこにはいる。大学の教員であり、附属幼稚園側からみれば、いわば「外部」の人間である私たちの役割は何だったのか。私たちはそこにおいてどのような存在として機能したのか。テープ

を聞きながらそのことに思いをめぐらせてみた。

もちろん、私たち大学側教員の全てが、同じ姿勢、同じ方針でそこに立ち会ったわけではない。とはいえ、そのカンファレンスに出席した大学側の教員たちがそこで果たした役割は、カンファレンス観察者、としてひとまずくることができるようなものであったといっているのではないと思われる。保育の現場に、研究者がときに「観察者」として参加するように、カンファレンスの場には私たちが研究者が、「参与観察者」として参加する。そのように捉えてもらえれば、今回のカンファレンスにおける大学側の教員の位置づけはもっとも的確に捉えられるのではないか。そのような参加の仕方がベストであるのかどうか。これは、もちろん、また別の問題として考えていかなければならない問題であるが。

作業仮説：教授・学習過程としてのカンファレンス

さて、「参与観察者」の一人である私（鳥光）の眼からみると、今回の一連のカンファレンスはどのようなものとして捉えることができるだろうか。

現在の附属幼稚園をめぐる特殊な条件下においておこなわれた、一種の教育過程であり、また同時に学習過程もあったものとして捉えることができるのではないか。これが、私の提示する作業仮説である。つまり、そのように捉えるとき、今回の一連のカンファレンスに生じた様々な出来事は、もっともよく理解することができるのではないか、という提案である。作業仮説とは、そのように捉えるとき、その事象はもっともよく捉えることができるような構想の提示、というほどの意味をもつ。それがあくまで、仮説であるということとはつまり、それは表明され、提示されるが、それ自体で真理であるという拘束力をもたないし、そのようなものであるとも主張しないということである。それは、検討され、検証されることを目的として提示される。カンファレンスの参加者である附属幼稚園側の教諭によって、そしてまた、参与観察者である大学側の、私以外の教員によっても、検討され、検証されることを、この提案はあらかじめ予測し、意図している。

本園のおかれている諸状況をめぐって

教授・学習過程という言葉自体がもしかしたら、異論を引き起こすかもしれない。まず第一に、この語にはなんととってもなんらかのある型を、学習者のなかに流しこむといったニュアンスがつきまとうからである。またさらに、教授・学習とってしまうと、そこには当然、教授する側と学習する側の分離が想定されてしまうということもある。カンファレンスはあくま

で、対等なもの同士の間で行われたものであって、そのような教授者と学習者という分離を前提として行われたものではないという異論がただちに聞こえてきそうである。

とはいえ、実際のところ、今回のカンファレンスにおいて現副園長である米神と元副園長である仲渡の果たした役割は、やはり教授者、あるいはもしこの言葉のもつニュアンスがきついとすれば、指導助言者であり、他方、附属の3人の主任保育者の果たした役割は指導助言を受ける側として位置づけられるとき、もっともよく理解できるものであると思われる。もちろん、このような位置づけは、指導助言するものもまた学習するということを妨げるものではない。

実際のところ、教授・学習過程としてのカンファレンスは、現在附属幼稚園がおかれている状況から考えると、是非必要なものであったし、また実際かなり有効に機能したのではないかと、思う。

現在附属幼稚園がおかれている特殊な状況とは、まず第一に、附属幼稚園そのものがきわめて小規模で、3歳児、4歳児、5歳児それぞれ一クラスづつからなる幼稚園であり、それぞれのクラスの主任保育者がいずれも、附属幼稚園の専任教諭としては経験が浅いということがある。唯一の長い経験のある保育者だった米神は2年前から副園長という管理職についている。

ただ、これまでであれば、それでも時間をかけて園の体制にそれぞれが慣れていく、ということが許されたことだろう。だが、現在ではそれに加えて、大学改革の波をうけて附属幼稚園もまたその存続に対する危機感を深めており、本園が生き延びる戦略としても是非とも、教員の力量を高めなければならないということが、とくに副園長である米神には緊急の課題として意識されているという事情も考慮される必要がある。この場合、附属幼稚園の教諭としての資質のなかには、単に保育実践者としての力量だけではなく、研究と実践をあわせておこない、ほかの保育者に対してモデル的な機能を果たすという能力もまた含めて考えられている。

もし、本園がもう少し規模的に大きく、附属幼稚園教諭としての保育者の経験の年数も様々であったならば、新しく入ってきた保育者たちもまた、習うより慣れろという、いわば認知的徒弟制にもとづくモデル学習によってそれなりに、附属幼稚園の教諭として必要な力量とはどのようなものであるのかを学習していったことであろう。だが、小規模園であり、モデル機能を果たすことができたはずの米神が管理職となり、直接の保育活動をおこなっていない。このような状況では、附属幼稚園の教諭にふさわしいと思われる保育に

についての考え方と技術を何らかの手だてを講じて伝達することが、急務の課題として、副園長にもまた実際に保育にあたっている主任保育者にとっても意識されて当然のことだろう。

保育行為の「型」を学ぶ

しかし、保育観なりそれに付随するノウハウといったものは、知識という形では、なかなか伝わりにくい。頭ではわかっていても、でも体がついていかない、といったことはよくあることである。このとき、大学の授業でたとえていえば、カンファレンスは、学生の研究発表を主軸とする演習形式の授業に相当するものとして機能したとみていいのではないかと、つまり、まず自分でレジュメとしてその日の保育についての「内省」を文章化する。そしてさらにそれに対するコメントを聞く。そのプロセスをとおして、もっとも基礎的な意味での「保育観」を、いや保育観というよりも、どのようなものが保育行為として妥当しどのようなものはそうでないのかを学んでいく。

どのようなものが保育行為として妥当し、どのようなものがそうでないのか。その基準を構成しているのは、それが「意図的」なものとして行われたのかどうか、そしてその行為の帰結に対してどれだけ「内省」がなされたかどうか、である。保育者は普段、保育実践の場において、子どもたちの状況に対応しながら、さまざまな言葉を発し、またさまざまな行為を行う。だがその多くはごく、何気なく、何の気なしに行われたものであったりする。

だが、カンファレンスの過程で、有形無形のうちに学ばれているのは、何の気なしに行われる行為は、保育行為には値しないということである。文章化したものを読むとよくわかることだが、これをした、あれをした、という行為の羅列は、読むものに了解されにくい。それがどのような行為であったのかを、読むものにわかるように書こうとすると、そのためには一定の書き方の型が必要になる。なんのために（意図）そういう行為をしようとしたのか、そうしようと思ったのはどうしてなのか（状況解読）、そしてそのように行なったことの帰結はどうだったのか。

意図、解読、内省という手順は、保育という行為を他者に了解させるための手続きであり、語りの「型」である。「物語」といってもいいかもしれない。そしてそのような「型」をもって語ることを学ぶことによって保育者は、同時にまた、実際に保育行為を行うに際してもたえず、自己の行為を意図的な行為として考えることを学んでいく。

このとき、一定の「型」といったものは、保育行為

を保育行為として成り立たせている基準のようなものである。それは、ある状況をどのように理解すべきなのか、あるいは保育にあたって、どのような点に留意すべきなのか、またどのような援助行為が適切であるのかということとをただちに意味するものではない。それらがもし、保育観の内容を示すものであるとすれば、むしろ保育観の形式とでもいったらいいだろうか。つまり、それは、保育行為を成立させる、あるいは保育行為とそうでない行為とをわける基準として機能するようなものとして捉えることができるようなものである。

このような「型」の学習はしかし、今回のカンファレンスの過程において、必ずしもスムーズに進行したわけではない。また現在もなお、順調に進行しているわけではない。ただ振り返ってみて転機と思われるのは、第3期以降、元副園長である仲渡がカンファレンスに参加したことである。米神はカンファレンス後に行われたインタビューのなかで、保育観を「びしばし」と戦わせるような場にできなかったのだが、必ずしもそうはなっていない、という感想をもらしている。

だが、実際第2期のカンファレンスでは、「びしばし」といえるような意見の対立がなかったわけではない。だが、その対立は、観察者である私の視点からみると、保育観と保育観を戦わせたことの結果というよりもむしろ、型の伝達に際しての、齟齬として解説できるものであるように思える。第3期以降、仲渡元副園長が参加するようになってからは、この伝達過程における齟齬は、私見だがかなり改善されたように思われる。

「内省」するとは—

だがこの一連のカンファレンスを通して学習されたのは、保育の「内省」の仕方そのものではない。むしろ、保育とは内省を含んで初めて成立するものであるという概念、そのようなものとして初めて保育行為と呼ばれるに値するものであるという概念である。文章を書くことを通して、また文章化されたものを前にして指導助言を受けることをとおして、そのような概念がいわば身体化される。そしてこのように型が学習されることによって初めて、いわば「内省」の前提が形成されるのである。

第3期の道下の研究保育の「内省」資料で、いくつかのトピックスについて述べられたあと、一行あけて最後に、ふとこう述べられている。「自分自身の癖なのか、子どもたちが遊びに目当てがもてていなかったり、行き詰まっているときには一緒に考え、きっかけができるように力を貸しているように思うが、軌道に乗り始

めると今度は他児のことが気になり、その後の様子を捉え切れていないことに気付いた」（配布資料より）。

いくつかのトピックスについて書いたあとで、ふと「気付いた」ことを書き記しているのだろう。それで？という問いに対しては、そう思っただけ、ということかもしれない。だが読む側が勝手に、これにその先を付け足して書かせてもらえば、「いったい私は保育ということを通して何をしようとしているのだろうか？」という言葉が、もう一押しすれば出てきそうに思える。もし、「内省」ということが意味をもつとすれば、そのときなのではないか。つまり、内省過程を含み込んだものとして、保育行為というものはあるのだということ学習する。だがそれはあくまで、ある型の学習過程であって、そこにはまだ「内省」そのものが成立しているわけではない。内省とは、いってみれば自分の頭で考えてみることである。正解のないことを考えてみることである。いったい、自分は何をしているのだろうか。そしてそこからさらに、いったい自分は何をしたいのだろうか、と。

6. おわりに

繰り返しになるが前章に提出したのは、あくまで作業仮説である。これが提示されるのは、検討され、反論されるためである。学部側教官が、カンファレンスの単なる「参与観察者」の立場をこえて、共同研究者としての地位を獲得するためにも、このような作業仮説の提示が、今後の双方のダイアローグの一環として機能することを期待したい。

注

(1)以上は、本論文の執筆者である鳥光・佐々木が、広島大学附属幼稚園副園長である米神に対して、カンファレンスの目的を尋ねたときの、米神の言葉をもとに再構成したものである。

引用文献

- 阿部和子（1989） 保育を記録することについての考察，保育研究，Vol.10，No.3，pp.19-30
秋田喜代美・無藤隆・安見克夫・藤岡真貴子（1995） コンサルテーションによる保育環境の構成～保育研究会の継続的検討～，保育学研究，Vol.33，No.2，pp.70-77
浜口順子（1982） 保育における理解の発展過程～現象学的保育研究試論～，お茶の水女子大学家政

学研究科児童学修士論文

- 平山園子 (1995) 保育カンファレンスの有効性, 保育研究, Vol.16, No.3, pp.18-29
- 広島大学附属幼稚園 (1999) 第27回幼児教育研究会研究報告 (未公刊)
- 森上史朗 (1993) 保育研究の在り方をめぐって～実践研究を中心に～, 保育学研究, Vol.31, pp.192-201
- 森上史朗 (1996) 保育の質を高める実践研究 (総説), 保育学研究, Vol.34, No.1, pp.8-11
- 大場幸夫・勝又清子・金子真子・本吉員子 (1989) 座談会: 保育日誌を考える, 保育研究, Vol.10, No.3, pp.19-30
- 佐藤学 (1992) 実践的・臨床的研究者の性格～新しい専門化像を求めて～, 日本教育学会第50回大会報告教育学研究, Vol.59, No.1, pp.64-65
- 佐藤学 (1992) 反省的实践家としての教師, 佐伯ゆたか・汐見稔幸・佐藤学編: 学校の再生をめざして2～教室の改革～, 東京大学出版会
- Schon, Donald. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books.
- 田代和美 (1996) 保育カンファレンスの検討～第2部研究者の立場から考える～, 保育学研究, Vol.34, No.1, pp.34-42
- 戸田雅美 (1999) 保育行為の判断の根拠としての「価値」の検討～園内研究会の議論の事例を手がかりに～, 保育学研究, Vol.37, No.2, pp.55-62
- 津守真 (1992) 実践の現場から発達を捉え直す～研究と実践の間で～, 日本教育学会第50回大会報告教育学研究, Vol.59, No.1, pp.66-67
- 津守真 (1987) 子どもの世界をどう見るか, 日本放送出版協会